法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-12

研究展望　2018年（平成30年）

YOKOYAMA, Tarō / 表, きよし / 宮本, 圭造 / 高橋, 悠介 / 小室, 有利子 / 中司, 由起子 / 山中, 玲子 / 伊海, 孝充 / 横山, 太郎 / 竹内, 晶子 / OMOTE, Kiyoshi / MIYAMOTO, Keizō / TAKAHASHI, Yūsuke / KOMURO, Yuriko / NAKATSUKA, Yukiko / YAMANAKA, Reiko / IKAI, Takamitsu / TAKEUCHI, Akiko

(出版者 / Publisher)
The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University / 法政大学能楽研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)
NOGAKU KENKYU : Journal of the Institute of Nogaku Studies / 能楽研究

(巻 / Volume)
46

(開始ページ / Start Page)
223

(終了ページ / End Page)
253

(発行年 / Year)
2022-03-25

研究展望 二〇一八年（平成三十年）

二〇一八年に刊行された能・狂言の単行本、および雑誌等に発表された論文を取り上げる。例年と同じく、単行本（表きよし）、資料研究（宮本圭造）、能楽論研究（高橋悠介）、能楽史研究（小室有利子）、作品研究（中司由起子・山中玲子）、狂言研究（伊海孝充）、その他（横山太郎）、外国語による能楽研究（竹内晶子）に分類し、分担執筆をおこなっているため、全体を展望するというより個別の論の紹介となっていることをお断りしておく。また、重要な論稿を見落とすなどの遺漏もあろうと思う。ご寛恕を願う。

【単行本】

『幕末期狂言台本の総合的研究　鷺流台本編』（小林千草著。A5判374頁。1月。清文堂出版。三八〇〇円）

成城大学図書館蔵『狂言集』14冊を考察の対象とし、日本語学だけでなく能楽研究や文学研究も含めた総合的な研究を目標とする書で、平成28年刊行の大蔵流台本編に続くもの。第Ⅰ部第一章では16番の詞章を収める「成城〈曲章四番〉本」について、宝暦名女川本と比較しながら考察している。第二章から第四章は〈昆布賣・伯養・墨塗〉など14番の詞章を収める「成城〈曲章三番〉本」について、第一章同様に宝暦名女川本との関係などを考察する。第五章は両方の本に収録されている〈墨塗〉の比較検討、第六章では『狂言集』のうちの鷺流台本の資料的位置づけと言語状況が検討されている。第Ⅱ部には両本の翻刻も収められており、狂言台本を丹念に考察した内容となっている。

『古典演劇研究の対象と視点』（東アジア古典演劇研究会編。A5判134頁。1月。金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センター。非売品）

国際文化資源学研究センターが取り組んでいる「東アジアの古典演劇と近代」という研究課題に関して、日本の古典演劇についての公開講演会での講演に基づいて論文化した9種の論考を収録する。内容は「舞台芸術における観衆―世阿弥能楽論と西洋演劇論との比較から―」佐々木香織、「江戸初期蹴鞠書『中撰実又記』と能楽―地下外郎派口伝生成の背景についての覚書―」村戸弥生、「加賀藩士の能の受容につい

て」竹松幸香、「道真像の変遷―菅丞相・雷電・来殿における面と装束より考える―」村上尚子、「宝生九郎の明治維新―能楽「中絶」期年譜考証の更新―」西村聡、「野口米次郎が再発見した能―その出会いと傾倒の時期をめぐって―」中尾薫、「郡虎彦「鉄輪」における古典と近代―「丑の時詣り」表象の受容をめぐって」鈴木暁世、「近代演劇への総合的＝復刻的アプローチは果たせぬ夢か?」近藤周吾、「泉鏡花「天守物語」と能〈羽衣〉―理想世界としての異界と天人憧憬―」山内麻衣子。加賀藩の能楽に関する論考だけでなく、さまざまな角度からの論考が収録されている。

『『平家物語』の能・狂言を読む』（山下宏明著。A5判394頁。2月。汲古書院。九三五〇円）

『平家物語』に取材した能・狂言をしっかり読み込むことを通して考察した研究書。冒頭の序・一・二で能・狂言を読むとはどういうことか、戦物語と能はどう関わるかが説明される。そして「三・「平家」物の能を読む」では〈朝長・俊寛・頼政・鵺・実盛・清経・忠度・敦盛・知章・船弁慶・通盛・千手・藤戸・屋島・大原御幸〉の15曲について、段ごとに内容をじっくりと読み込みながら補説で考察を加えていく。細かな検討の中に著者の鋭い視点が現れており、興味深い指摘が次々と登場する。「四・間狂言の世界」では〈屋島・忠則・敦盛〉の間狂言を検討する。間狂言は多様な詞章が存在していて考察が難しいが、能を支える間狂言の役割を浮かび上がらせている。「五・「平家」物狂言について」では〈柑子・井礒・川上・瞽女座頭・釣狐〉の5曲を取り上げ、平家語りとの関りを考察する。長年軍記物研究に取り組んできた著者ならではの視点から、変化し続ける『平家物語』の流れの一部である能・狂言を幅広く考察した意欲的な書である。

『能の本2』（村上ナッツ・文、つだゆみ・マンガ、辰巳満次郎・監修・コラム。四六判264頁。3月。西日本出版社。一六〇〇円）

平成28年に出版された『能の本』の続編。〈竹生島・巴・熊野・景清・鵺・石橋・船弁慶・姨捨・小袖曽我・谷行・養老・清経・松風・蝉丸・紅葉狩〉の15曲を取り上げ、その内容をわかりやすく説明する。辰巳満次郎による見どころの説明やコラムもあり、作品の中の特徴的な型を図で説明するといった工夫も見られる。

『カラー百科　見る・知る・読む　能舞台の世界』（小林保治・表きよし編、石田裕写真監修。菊判352頁。3月。勉誠出版。三五二〇円）

能楽堂や能舞台の特色をさまざまな角度から紹介した本。第一部「能舞台の誕生と歴史」では「能舞台の変遷」表きよし、「能楽堂の空間構成とデザイン」奥冨利幸、「図面から読む能楽堂」大江新という3編の解説と、松野奏風・松野秀世が能楽関係誌に寄稿した鏡板に関する考察の再録、小林保治

「能舞台細見―入れ子式能楽堂を例として」などにより、能楽堂・能舞台の特色を詳しく解説する。第二部「全国能楽堂・能舞台案内」では、東北から九州に至る五十余の能楽堂・能舞台の様子を写真とともに紹介している。紹介文の一部は編者によるものだが、できるだけその能楽堂・能舞台と関わりのある人に紹介文の執筆を依頼しているため、それぞれの成立や変遷といった特色がよくわかる。

『僕らの能狂言　13人に聞く！これまで・これから』（金子直樹著。新書判296頁。3月。淡交社。一五四〇円）

著者が13名の能楽師と行った対談を集成したもの。人間国宝などトップクラスの能役者ではなく、50代以下の中堅・若手の役者を選んだ点に特色があり、シテ方だけでなくワキ方・狂言方・囃子方まで幅広い立場の役者が登場している。壁に突き当たりながらも自分の芸に真摯に向き合い、能楽の将来に危惧と期待を抱く役者たちの思いが著者によって巧みに引き出されている。

『服飾分野の資料情報の発信に向けた基礎的調査（一）　賀多神社所蔵能狂言装束調査報告書』（編著者なし。A4判73頁。3月。文化学園大学和装文化研究所。非売品）

平成28年に三重県鳥羽市にある賀多神社所蔵の能装束や能道具の悉皆調査を行った際に作成された報告書。賀多神社では江戸時代中期から「神能楽」が行われるようになり、能舞台も設けられた。現在も幕末に作られた組み立て式の舞台が使われており、春の例大祭の時には能・狂言や仕舞が奉納されている。神社所蔵の能装束は幕末の鳥羽藩主稲垣長明が寄贈したものと、明治以後に所蔵に加えられたものとから成るという。調査結果はそれぞれの装束のデータと写真を掲載する形で報告されており、「調査概要」として、田中直人「地域の歴史と資料継承の経緯」、長崎巌「賀多神社所蔵能装束・狂言装束について」、門脇幸恵「賀多神社の能道具について」が収録されている。

『服飾分野の資料情報の発信に向けた基礎的調査（二）　豊橋魚町能楽保存会所蔵能狂言装束調査報告書』（編著者なし。A4判97頁。3月。文化学園大学和装文化研究所。非売品）

平成29年に愛知県豊橋市の豊橋魚町能楽保存会所蔵の能装束や能道具の悉皆調査を行った際に作成された報告書。江戸時代の豊橋は大河内家が吉田藩主として支配していた。明治以後も安海熊野社で町民により能の奉納が行われていた。保存会所蔵の能装束類は、明治になって大河内家から町民が購入したものなど複数の入手経路がある。400点近くある所蔵品について、基本データと写真により報告がなされており、「調査概要」として、田中直人「地域の歴史と資料継承の経緯」、長崎巌「豊橋魚町能楽保存会所蔵能装束・狂言装束について」、門脇幸恵「豊橋魚町能楽保存会の能道具について」が収録されている。

『能鑑賞二百六十一番　現行謡曲解題』（金子直樹著。新書判392頁。5月。淡交社。一六五〇円）

平成13年刊『能楽鑑賞百一番』、平成20年刊『能鑑賞二百一番』に続き、二六一番の現行曲（復曲能や新作能を含む）すべてを網羅した解説書。扱いやすいよう判型を新書判としたため、写真はなく、1～2頁で能1番の内容・背景・特色などを説明する。取り上げた曲数が多いので新書判にしては厚手だが、現行曲を見渡すことのできるコンパクトで便利な本である。

『金剛宗家の能面と能装束　特別展』（三井文庫三井記念美術館編。A4判141頁。6月。三井記念美術館。二二〇〇円）

6月30日から9月2日まで開催された特別展の図録。公益財団法人金剛能楽堂財団と金剛家が所蔵する能面・能装束などが展示された。図録には能面58点、装束27点、鬘帯5点、腰帯5点と初参人形（天保9年〔一八三八〕に孝明天皇から金剛禎之輔が拝領したもの）2点が掲載されている。豊臣秀吉が愛蔵した小面3面の1つである「雪の小面」も出展され、図録には掲載されていないものの三井記念美術館蔵の「花の小面」も特別に展示された。金剛巌による「能面つれづれ」「金剛家の能面―その来歴など」が収録されており、展示品解説も金剛巌が執筆している。

『山本順之先生傘寿記念　相音　二つの声を求めて』（山本順之先生傘寿記念冊子刊行委員会編集。B5判72頁。7月。山本順之発行。非売品）

観世流能楽師で鎌仙会所属の山本順之が傘寿を迎えたことの記念誌。今日までの活動の様子が詳細に記されているが、特に注目されるのは観世寿夫に入門して以来書き続けた百冊に及ぶノートの存在で、その中から心に残る寿夫の教えを紹介している。26曲について演じる上での注意点などが記されているが、抜き書きなので全体を見ることができればと思わせられる。

『国立能楽堂開場35周年記念特別展　土佐山内家の能楽』（国立能楽堂事業推進課調査資料係編。A4判変型121頁。8月。日本芸術文化振興会。二五五〇円）

8月30日から11月4日まで国立能楽堂で行われた展示の図録。高知県立高知城歴史博物館が所蔵する土佐藩山内家伝来の能面や能装束などが展示された。図録には能面52点、狂言面2点、能装束7点のほか、大鼓・小鼓の胴や笛、面箱・鈴などの小道具も掲載されている。また山内家の能への取り組みを伝える古文書13点が紹介されているのも貴重である。それぞれの資料の解説のほかに、尾本師子「土佐山内家の歴史と伝来資料について」、宮本圭造「土佐山内家の能楽」、宮本圭造「土佐山内家の能狂言面と山内容堂」が収録されており、山内家が能とどのように関わったかが具体的に理解できるようになっている。

『能舞台　歴史を巡る』（森田拾史郎・写真、児玉信・池田哲夫・文。A5判256頁。9月。建築画報社。三八五〇円）

北海道から九州までの六十余の能楽堂・能舞台を紹介している。特に佐渡については14の能舞台が取り上げられており、池田哲夫の紹介文により、印象的な写真とともにそれぞれの特色が説明されている。佐渡以外の能楽堂・能舞台については児玉信が説明文の執筆を担当しているが、各地域における能の歴史が踏まえられており、能舞台そのものの特色だけでなく、その地で能がどのように人々に楽しまれてきたかも知ることができるものとなっている。

『新作能「沖宮」イメージブック：魂の花―緋の舟にのせて』（石牟礼道子・志村ふくみ著、石内都写真。B5変形判186頁。9月。求龍堂。四一八〇円）

天草四郎の霊をシテとする新作能〈沖宮〉は詩人・作家である石牟礼道子作で、石牟礼と染色家・随筆家の志村ふくみとの対談を契機として生み出された。石牟礼は平成30年2月に逝去したが、志村は演能に向けて装束作製に取り組み、同年10月に京都で、11月には東京で金剛龍謹がシテを勤めて上演された。天草の関連する場所や装束・面などの写真、石牟礼の詩や文、志村や金剛龍謹の〈沖宮〉上演への思いなど、〈沖宮〉に関連するさまざまな事柄を集成した書となっている。

『林原美術館所蔵　大名家の能装束と能面』（渋谷区立松濤美術館編。B5判127頁。10月。松濤美術館。一五〇〇円）

10月6日から11月25日まで開催された展示の図録。岡山の林原美術館所蔵の能装束・能面などが展示された。展示品のほとんどは岡山藩主池田家旧蔵のものである。装束40点、鬘帯40点、腰帯20点、中啓10点、能面15点の写真が収められている。林原美術館館長谷一尚「林原美術館の沿革と主な収蔵品」、長崎巌「能装束の歴史と林原美術館所蔵・備前池田家伝来の能装束」、田邉三郎助「池田家伝来の能面」が収録されているほか、資料として「能装束の出立と名称」などの解説文も掲載されている。

『梅若研能会九十年の歩み』（梅若万佐晴ほか編集。B5判88頁。10月。梅若研能会。二五〇〇円）

昭和3年に研能会初回を開催してから90年となるのを記念して、梅若万三郎家の歩みをまとめた本。小林保治「梅若万三郎家の歩み」では梅若家始祖とされる橘諸兄の話から始めて初世から三世の梅若万三郎の活動を詳細に辿る。三上紀史「梅若万三郎家の能舞台」では梅若家が拠点とした能舞台の変遷や現在の梅若万三郎家舞台が誕生するまでの経緯を説明する。松田存「機関誌「橘香」の歩み」「梅若研能会の海外公演」や三世梅若万三郎と三上紀史の対談など、さまざまな角度から梅若万三郎家の歩みを明らかにしていく。梅若家伝来の能面や能装束などの写真も掲載されている。

『「現代能楽集」の挑戦　錬肉工房1971―2017』（岡本章編著。A5判660頁。10月。論創社。四八〇〇円）

昭和46年に岡本章によって創設された錬肉工房の45周年を記念する論集。錬肉工房は能を現代に活かしていく活動に取り組み、「現代能楽集」として14作品を上演してきた。第一章には岡本章の能と現代に関する論考3編、第二章には西堂行人・羽田昶・竹本幹夫・小田幸子・新野守広の岡本の活動に対する論考、第三章には「現代能楽集」に参加した能役者などのエッセイ8編を収録している。第四章には平成元年の錬肉工房シンポジウム「〈ことば〉のいのち、〈からだ〉の声」と平成14年の早稲田大学演劇博物館企画展シンポジウム「能と現代演劇」、第五章には錬肉工房アトリエなどで開催された那珂太郎・渡邊守章など5人の講演、第六章にはさまざまな対談や座談会の様子が収められている。第七章の資料集も含め、錬肉工房の活動や能に対する考え方などが十分に把握できる豊富な内容となっている。

『絵入謡本と能狂言絵　神戸女子大学古典芸能研究センター研究資料集2』（神戸女子大学古典芸能研究センター編。B5判148頁。11月。思文閣出版。四六二〇円）

神戸女子大学古典芸能研究センター所蔵の『絵入謡本』の挿絵36点と、神戸女子大学図書館蔵の『能狂言画帖』『能狂言絵巻』『能狂言図巻』を紹介する。『絵入謡本』は加賀前田家旧蔵で、能1番1冊の12冊から成り、1番につき4点程度の挿絵があったらしい（一部は剝がされて無くなっている）。どのような場面が挿絵になっているかなど、他の謡本と比較考察した小林健二による解題、『絵入謡本』詞章の翻刻、『能狂言画帖』などの解題も収録されている。

『作家と楽しむ古典　平家物語　能・狂言　説教節　義経千本桜』（古川日出男・岡田利規・伊藤比呂美・いしいしんじ著。四六変形判208頁。11月。河出書房新社。一六五〇円）

平成26年から令和2年にかけて出版された『池澤夏樹＝個人編集　日本文学全集』（河出書房新社）の執筆者による講演を収録したもの。この全集の「能・狂言」を執筆したのは劇作家・小説家の岡田利規で、能の詞章は密度の高い圧縮されたものであること、現代語訳はそれを解凍する作業であることを述べている。また、能が幽霊という道具を見出したことの賢さ、地謡という融通無碍の魅力を持つものを利用する巧みさなども指摘されており、現代語訳という作業を通して劇作家が感じ取った能の特色を伺い知ることができる。

『芸の心　能狂言　終わりなき道』（野村四郎・山本東次郎著、笠井賢一編。四六判240頁。12月。藤原書店。三〇八〇円）

ともに狂言の家に生まれながら、シテ方への道を進んだシテ方観世流野村四郎と、狂言の家の芸を継承して活躍する狂言方大蔵流山本東次郎の対談集。第一夜から第三夜に分かれており、第一夜では稽古を始めた幼少期から二十歳前後の様

子が紹介される。厳しい稽古の様子や、野村がシテ方の修業を始めた頃の苦労、観世寿夫の影響や「披キ」の思い出などが語られている。第二夜は能や狂言の様々な事柄に話が及ぶ。能楽界で活躍する二人ならではの厳しいまなざしが感じられる。第三夜は異流共演や新作・復曲などへの取り組みが取り上げられている。二人がしっかりした思いを持ちながら積極的な取り組みを行ってきたことがわかる。巻末に笠井賢一による「〈補論〉能・狂言の歴史」と「舞台作品解説」が付されている。（表）

【資料研究】

この年は、謡本に関する研究が多く見られた。武蔵野大学美術館・図書館では、同年、「和語表記による和様刊本の源流」と題する展示が行われ、法政大学鴻山文庫蔵光悦謡本上製本百帖をはじめ、江戸初期の板行謡本が多数出展された。その図録『和語表記による和様刊本の源流　論考編』（11月。同館）には、光悦謡本に関わる以下六本の論考を収める。宮本圭造「「光悦謡本」とその時代」は、光悦謡本誕生の時代背景として、豊臣政権から徳川政権への政権移行期の社会変革に注目した論で、光悦謡本とその他の江戸初期古活字謡本との関係、光悦謡本の影響下に生まれた同装訂の雲母刷料紙謡本写本、伝光悦筆の鈔写謡本の存在にも触れる。玉蟲敏子「「光悦謡本」の美」は、光悦謡本表紙の雲母刷模様に焦点を当て、図様の様式が、織物に由来する連続模様・唐紙障子に用いられた大柄な連続模様・大和絵系景物画に由来する叙景的な模様・梅竹鹿などの動植物模様の四種に分類されることを示し、伝統的な格式の高い模様から室内調度の襖の唐紙にいたる、新旧さまざまな系統の模様を取り込んだ多様性にこそ光悦謡本表紙の特徴がある、と指摘する。新島実「嵯峨本謡本の美を探る」、寺山祐策「嵯峨本謡本復元プロジェクト」、竹中健司「「彫り・摺り」について」、大入達男「「料紙・綴じ」について」の四本は、武蔵野大学の研究チームが推し進めた光悦流書体による古活字謡本の復元プロジェクトの経緯と復元の過程で生じた様々な問題点をまとめたもので、新島稿は全体の概要、寺山稿は鈔写謡本に基づく木活字制作について記し、竹中稿は活字駒の彫刻と印刷、大入稿は紙漉きと製本について、職人の立場から述べる。古活字謡本の復元に用いられたのは、光悦寺蔵の江戸初期写光悦流書体謡本「三井寺」（同謡本の概要については前記宮本稿が触れている）で、同謡本を版下として木活字を制作するという手法が適切かどうかはなお議論の余地があるところだが、版下を基に古活字謡本を作り上げる作業が、いかに複雑で困難であったかがよく窺われ、江戸初期の光悦謡本制作の現場を垣間見るような面白さがあった。ことに、厚手の光悦謡本の料紙が「漉き合わせ」の手法によるものであることを明らかにした大入稿を興味深く読んだ。

『能楽研究』には、伊海孝充「玉屋謡本の研究（四）」（42号。3月）が載る。玉屋謡本に関する一連の研究の結章に位置づ

けられるもので、同謡本の節付表記に着目し、光悦謡本・元和卯月本との比較を行った上で、玉屋謡本が江戸初期の謡詞章流動の様相を伝える資料として重要である、と結論づける。

この他にも、謡本に関する論考として以下の三本があった。小山愛未「『謡曲百番』にみる表紙絵と詞章の関係」（『文化財学報』36。3月）は、奈良大学に提出した卒業論文を改稿したもので、能研蔵の伝観世小次郎信光筆謡本と元和卯月本の表紙絵についての論。伝信光本が詞章の内容に則した表紙絵を描く傾向が顕著であるのに対し、元和卯月本にはあまりそうした傾向が見られないことを指摘する。伝信光本の制作年代は同稿が想定する室町末期～桃山期よりもさらに下る可能性があり、それ以外にもなお吟味すべき点が少なくないが、真摯に資料と向き合った丁寧な調査には好感を持った。高橋葉子「梅若派謡本刊行者「小 梅洲」」（『武蔵野大学能楽資料センター紀要』29。3月）は、史上初の「直シ入リ謡本」として明治十八年に刊行された観世流謡本の刊者をめぐる考察。同謡本の奥付に刊者として見える「小 梅洲」は、従来伝不明とされていたが、『謡曲名家列伝』の記事に基づき、日本橋区で商売を営む梅若実門下の素人弟子、小川勘助であったことを明らかにする。『梅若実日記』に拠ってその芸歴を確認するとともに、同謡本の版下筆者、梅若薫（馥）の有力なパトロンであったことにも言及する。天野文雄「観世流の『国栖』の詞章とその来歴」（『銕仙』680。4月）は、他流との異同が多い観世流〈国栖〉の詞章変遷を辿ったもの。斎藤香郁の戦前の研究を承けて、「浄見原の天皇」を「やごとなき御方」に改めるといった現行の改訂詞章が、天保十一年の刊記を持つ別組二十八番本に始まること、同謡本には他にも〈放生川〉〈摂待〉などに、貴人にかかわる待遇表現の改変が見られることを指摘する。なお、別組二十八番本の刊年につき、同稿は「明治に入ってからの可能性」が高いとするが、すでに幕末の文久三年・慶応元年の時点で、同謡本の版権の大部分が内組・外組謡本とともに山本長兵衛から橋本常祐に譲られており（檜書店蔵文書）、幕末維新期の謡本の刊行状況からしても、やはり幕末の刊行と見るのが無難なのではなかろうか。詞章改訂の背景とその関与者が気になるところである。

謡本ではないが、世阿弥自筆能本に関する研究もあった。佐藤嘉惟「世阿弥自筆能本の表音的表記」（『能と狂言』16。6月）がそれで、世阿弥自筆能本に見られる個々の音声現象の表記実態を詳細に検討し、一貫した表音的表記の方針で書かれたとされることの多かった世阿弥自筆能本に対し、従来の通説の見直しを図り、実際には非表音的表記が散見すること、能本の表記の在り方には統一性があまりなく、大きな揺れが見られることを明らかにする。緻密な考証に基づく論には説得力があり、世阿弥自筆能本の国語学的研究に新たな地平を切り開くものとして大いに注目されよう。表記実態の解明にとどまらず、そのような表記の揺れが生まれた背景として、既存の本を書写したことによる影響の可能性を想定し、〈柏崎〉〈江口〉における先行曲からの転用箇所と表記との関係

に言及するなど、能作史にも目配りをした周到な内容で、示唆に富む。同じく能楽資料を国語学の観点から扱った論考として、竹村明日香・宇野和・池田來未「謡伝書における五十音図」（『日本語の研究』14-4。12月）も注目される。室町後期から江戸期にかけての謡伝書を博捜し、そこに見える五十音図と発音注記を日本語音声学の立場から検討したもので、謡伝書の五十音図を、『混沌懐中抄』『金春安照秘伝書』『五音次第』など、悉曇学の影響を受けたと思われる系統と、『塵芥抄』『謡之秘書』などに代表される謡伝書の一群の系統とに分類し、後者の説が契沖『和字正濫鈔』の五十音図に影響を及ぼした可能性について論じる。前者の説が金春系の伝書に比較的多く見えるといった指摘も興味深く、謡伝書における音声説がいかにして形成されてきたかを考える上で、重要な手がかりを提示している。今後の更なる研究の進展を期待したい。

同稿をはじめ、近年、謡伝書に関する研究がとみに盛んであるが、それを主導しているのが関西の研究チームで、『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』12（6月）は、「〈研究会研究報告〉江崎家旧蔵謡伝書『師伝書』を読む」として、同センターに寄贈されたワキ方福王流の江崎家資料のうち、『師伝書』の表題を持つ江戸後期の謡伝書に関する共同研究の成果をまとめて収録する。「師伝書研究会」名義による「『師伝書』解題と翻刻」に続き、高橋葉子「謡の極意―拍子の秘事」、藤田隆則「『師伝書』に授受された謡の体系と謡のあるべき姿」、大山範子「江崎家旧蔵資料の謡伝書について」、樹下文隆「『師伝書』に見る広島藩の能楽事情など」の四本。右の解題（長田あかね執筆）によれば、『師伝書』は広島で観世流の謡師匠として活動していた不求なる人物の曾孫弟子がまとめた伝書。その不求のほか、不求門弟の猶原、さらにその門弟の武永茂左衛門など、三代にわたる師匠の教えが書き留められており、謡教授の実態が具体的に窺われる好資料という。武永は師匠の猶原のほか、観世大夫直弟の為楽や、広島を訪れたことのある公儀御役者、高安彦太郎からも教えを受けており、特定の流儀に捉われない豊富な内容を含む。伝書に記された個々の記事については、高橋稿が丁寧な解説を行っており、内容把握の上で大いに参考になり、それを踏まえた藤田稿が、本書の謡伝書としての特徴、記事の相互関係・構造を明確にする。その藤田稿が注目するように、本書は謡師匠が稽古の場で実際に語った印象的な比喩や言葉が多く書き留められている点がとりわけ重要で、『申楽談儀』や『禅鳳雑談』にも通じる面白さが感じられる。広島城下での謡会にかかわる具体的な記事もあり、その能楽史資料としての意義については、樹下稿が言及している。大山稿は同センターに寄贈された江崎家旧蔵資料のうち、『師伝書』をはじめとする謡伝書五冊の書誌解題。詳細な解題は示唆に富み、五冊のうちの『謡曲閲言解』が京都の高安流ワキ方岡家の旧蔵本であったらしいとの指摘も興味深いが、これらの書物を含む江崎家旧蔵資料の全体像が分かると大変有難く、いずれ

資料全体の目録がまとめられることを期待したい。

この他、近世の能楽史に関わる資料研究として、入口敦志・江口文恵・近藤弘子・田草川みずき・深澤希望・柳瀬千穂・竹本幹夫「『葛巻昌興日記』所引能楽記事稿（貞享三年閏三月・四月分）」（『演劇研究』41。3月）があった。これまで『演劇映像研究２００８』『演劇映像研究２０１０』『演劇研究』に六回にわたって掲載されてきた資料研究の続編で、表題にもある通り、今号には貞享三年の二カ月分の能楽関係記事を収める。この間はちょうど将軍綱吉の能数寄の影響によって前田綱紀が能の稽古に熱心に取り組んだ時期に当たっており、貞享三年四月三日には江戸城二之丸で綱紀が徳川御三家・甲府宰相と並んで〈桜川〉のシテを勤めたことが知られているが、その演能に向けた稽古の記事などが頻出し、当時の様子が具体的に窺われる点が貴重である。各日条の翻刻に付された解説も詳細で、行き届いた内容。

能面に関する論考は、アダム・ゾーリンジャー「加賀・越前の井関」（『能楽研究』42。3月）の一本のみ。面打井関家に関する新たな作例として、オランダ・ロッテルダム世界博物館に所蔵される「痩男」の存在を報告した論で、彩色下に、慶長年間、井関親信作の本面をもとに加賀小松の地で制作した由の墨書があることを紹介する。面打研究に一石を投じる貴重な資料報告。この面を手掛かりに、加賀・越前方面で制作されたその他の井関作の翁系仮面・能面・馬鞍を網羅し、井関家がこの地方でも精力的に活動していた様子を明らかにしている。

珍しく能役者の墓碑銘を取り上げるのが、山川均「能楽大倉家と墓石銘文」（同和問題関係史料センター『研究紀要』22号。3月）。大鼓大蔵源右衛門家と小鼓大倉家の菩提寺である奈良の金躰寺・称名寺、江戸の正覚寺の墓碑銘を掲げ、それぞれ系譜の誰に該当するかを考察する。

最後に、雑誌『観世』連載の「観世文庫の文書」。本年の各月号では、以下の資料が取り上げられた。高橋悠介「伝観世宗節筆能伝書断簡「よしの龍田の花紅葉」」、佐藤嘉惟「享保六年服部周雪奥書列帖装無章句本「布留」」、長田あかね「観世流謡学掲的」、中尾薫「世意深集」、鵜澤瑞希「能「鷺」図」、柳瀬千穂「能之次第」、小川剛生「慶長二年秀吉朱印状「観世座支配之事」」、伊海孝充「謡本「木曽」版権免許之証」、橋場夕佳「新作謡本草稿「月照」」、横山太郎「身構えの人体図」、恵阪悟「観世織部・同左吉宛て服部宗碩書状」、江口文恵「元文年間竹千代様御誕生御祝儀能番組」。（宮本）

【能楽論研究】

能楽論研究については、世阿弥と禅竹の伝書に関わる論文が数本出ている。重田みち「『花伝』から『風姿花伝』への書き替えに見る世阿弥の〈歌舞能〉志向―「舞がかり」と歌道の重視へ」（『演劇研究』41、3月）は、世阿弥の〈歌舞能〉志向の萌芽が、『花伝』の増補過程の中に見出せることを論じる。場面に即した具体的な意味がある所作「はたらき」に対

して、曲舞謡や器楽伴奏の拍節型リズムに合う、抽象化・様式化された「舞」の概念を整理した上で、『風姿花伝』年来稽古篇・物学篇の児・老人・修羅・神・唐事の藝について、それぞれ〈歌舞能〉志向と関わる要素を、同書の改訂過程と合わせて検討する。特に、修羅について、源平の武将を「花鳥風月」に結びつけ「舞がゝり」を具体的演出とした物学篇の記事は応永二十年代半ば頃の増補と推測し、神の演出に「まいがゝりの風情」を説く物学篇の記事も、応永十五年前後以降の増補とし、同二十年代半ば頃の増補であった可能性も提示している。そして、『風姿花伝』成立期に著されたとみられる序文と問答篇第三条にみえる「歌道」重視にも、「舞がゝり」と合わせて注目している。

また、重田みち「「かかり」とは何か―良基連歌論と世阿弥能楽論」（『鍐仙』679、3月）は、世阿弥伝書の「かかり」の意味について、二条良基等の連歌論の「かかり」と比較して論じたもの。「かかり」を、①「〝歌人・連歌数寄者・能役者等の作風・藝風〟の意、能の作品群・藝種等の習合的な呼称」、②「和歌・連歌、能の謡の詞の続き具合や響き、音韻の流れなどを表す」意の二つに分けて整理する。②については、「（謡う時間的流れの）〝全体にわたる趣、雰囲気〟などと訳しても文意が通るもの」があるとし、このニュアンスが能の所作をも含む一連の藝全体の時間的流れの意味で用いられたのが、『風姿花伝』奥義篇で近江猿楽の藝風として言及される「かかり」であるとする。

同じく重田みち「『風姿花伝』神儀篇の成立経緯と著述の意図―「申楽」命名説を軸として」（『日本研究』58、11月）は、神儀篇の成立を応永二十五・六年前後の時期と推測、その「申楽」命名説の発想の源流が『説文解字』にあることや、文体、上宮太子という呼称などを検討し、神儀篇の第一・二・三条は知識人の著述、第四・五条は知識人の著述に世阿弥が加筆したもの、第六条は世阿弥の執筆、と推定する。また、桃源瑞仙『史記抄』にみえる世阿弥の言談に「申楽」表記が「無憑拠」とされていることについては、もと「神楽」であったことを世阿弥が強調した結果で、神儀篇の「申楽」命名説とは矛盾しないと解釈している。そして、世阿弥は神儀篇で、猿楽の神道性・日本国性や春日社の神事との関係を強調しているとし、翁猿楽奉仕や春日社参勤を重視する背景には、足利義持の増阿弥厚遇が関わっていたと推測する。

禅竹能楽論に関連するものでは、以下二本が挙げられる。樹下文隆「《松風》から《熊野》へ―禅竹の「春の曙・秋の夕暮」説をめぐって」（『神女大国文』29、3月）は、『歌舞髄脳記』精撰本において、禅竹自作と思われる《熊野》が、世阿弥作の《松風》と並ぶ高評価を与えられていることに注目し、同書（草稿本・精撰本）における両曲の評や、『三五記』和歌十体説の配当の変遷を丁寧に読み解く。草稿本で「物哀体」にあった《松風》を精選本において「拉鬼体」に移しているのは、《松風》の内容に『三五記』拉鬼体に挙げられる「神風や」歌（新古今集・羈旅）・「恩賜御衣」句などに含まれる語との連

想的なつながりによるとし、これがさらには拉鬼体を幽玄無上とする六輪一露説の形成につながった可能性を提示する。《熊野》について『拾遺愚草』上の「真木の戸は」歌が挙げられるのは《熊野》の終曲部を象徴するものとして撰ばれたと推測し、《熊野》の主題を「会者定離、あるいは愛別離苦」と捉え、《松風》をふまえて作られた能であることを論じている。『歌舞髄脳記』の草稿には、和歌十体説の配当という点で六輪一露説の原型がうかがわれ、そこで例示される和歌と謡曲の関係について読み解く必要性を問題提起している。

フレデリック・ジラール「志玉の『華厳五教章』の講義録を通じての金春禅竹筆の『六輪一露之記』の仏教思想」（『東洋学研究』55、3月）は、華厳の学僧であった志玉との関係や、志玉の『華厳五教章』の講義録である『五教章聴書鈔』にみえる記事等を重視して、六輪一露説の思想について考察するもの。基礎的な事項の紹介も含まれているが、まず六輪一露説が円相で表現されていることについて、中国華厳五祖・宗密の『禅源諸詮集都序』にみえるという、完全なる空である円相から出発して同様の円相で終わる「十輪」や、『人天眼目』における「華厳六相義」の図に注目して関連を示唆しているのは新しい着眼点である。また、一露の剣のイメージについては禅の影響を想定する。幾つかの指摘の中でも、志玉以前に東大寺戒壇院の礎を築いた凝然の『音曲秘要抄』に、「音声一塵につきて法性縁起を明し、音曲仏事を彰わす」という思想がみえるという指摘は重要であろう。（高橋）

【能楽史研究】

能楽史研究のうち、室町時代に関する論文は四本あった。

山路興造「「松囃子」考」（『芸能史研究』222。7月）は、松囃子の歴史と芸態についての論考。松囃子を素人による祝福芸能で、禁裏の左義長囃子とは区別すべきものと定義づけ、『看聞日記』に見える応永期松囃子の具体像を紹介する。また松囃子の種々相として、郷村（地下）民による松囃子・女松囃子・大名松囃子の記録を分析し、それら風流松囃子の芸態や左義長囃子との違い、風流松囃子の絵画資料、松囃子の囃子物と詞章、同時代の風流囃子物の芸態を示す。さらに声聞師による松囃子、観世の松囃子、松囃子の源流について考察し、千秋萬歳を松囃子の源流と推察する。

松岡心平「松囃子から謡初へ」（『観世』。9月）は、足利義教が室町御所に導入した松囃子から謡初が生まれた道筋について。永享元年と二年に赤松主催の大名松囃子が室町御所で行われた際の記事や、同四年に足利義教が大名松囃子の歌詞について問い合わせた記録を紹介し、『申楽談儀』に見える永享二年の松囃子問い合わせが義教から世阿弥への下問であった可能性を指摘する。この正月松囃子の担当は、永享三年に音阿弥の申し出で声聞師から観世へと変わり、その後観世が松囃子を演じることが「御佳例」になったという。さらに永享十年の声聞師松囃子推参禁止令、義政時代の観世によ

る謡初の定例化にも言及し、観世が独占した演能つき松囃子と謡初が合体し発展を遂げる中で、江戸幕府の謡初は成立していったのではないかと指摘する。

天野文雄「能苑逍遥七六　足利義政下賜観世家旧蔵の千鳥の面箱について」（『おもて』。138）は、寛正五年糺河原勧進猿楽で観世大夫が足利義政から下賜された面箱をめぐる考察。二十四世観世左近の随想によると、昭和期の観世家には面箱の写しがあるのみで、真物は野村財閥総帥野村得庵の所蔵となっていたことを取り上げ、その経緯を紹介する。それによれば、観世家は江戸後期にこの面箱を抵当として丹波篠山城主青山家へ借金をし、幕府式能の際などには同家から借用していたが、維新後に売立に出た際、素人弟子であった野村得庵に入手を依頼したという。また昭和五年に写し（大槻家所蔵）が作成されたことや、千鳥のデザインが観世流大成版の表紙になったことにも触れる。

同じく天野文雄「応永三十三年の「観世三郎」の勧進猿楽をめぐって」（『観世』。1月）は、『東寺廿一口供僧方評定引付』応永三十三年五月十三日条にみえる「観世三郎」が三郎元重（音阿弥）か世阿弥かについて。江口文恵の考察を踏まえつつ、元重が応永末年頃に「観世」と呼ばれていたことや、『隆源僧正日記』応永三十一年四月十八日条の「観世三郎」が世阿弥であることへの見解を示し、応永三十三年の「観世三郎」は三郎元重であると結論付ける。また応永三十四年に元重が催した勧進猿楽が義円（後の足利義教）の意向で実現したこと等から、応永三十三年の勧進猿楽も義円の後援であった可能性を指摘し、元重の役者としての評価がこれまで以上に高いものであった可能性に言及する。

近世能楽史については次の二本があった。

二木謙一「武家儀礼と能――寛永期江戸幕府の謡初――」（『観世』。8月）は、寛永期における幕府謡初の模様を『江戸幕府日記』により明らかにした論。幕府四大儀礼である年末御礼・八朔・嘉祥・玄猪の概要と寛永十二・十三年の謡初の次第を明らかにする。謡初では、将軍・御三家・大名諸士が大広間に着座し、下壇南側板縁に役者が居並する様子、囃子が始まり、将軍や三家等が肩衣を役者に与える様子を紹介する。また謡初が四大儀礼と異なるのは飲食の形式で、着座の大名諸士全員に酒食が供され、盃一つの「お通り」（盃一つで将軍が召された盃を順次にまわしていく室町以来の作法）で行われる点にあると指摘する。

宮本圭造「観世家のルーツを辿る旅――音阿弥の三百回忌法要と観世元章――」（『観世』。6月）は、元章による音阿弥三百回忌法要について。まず、京都府一休寺（酬恩寺）にある音阿弥の墓碑銘に「寛永」の文字が読み取れることを報告、その墓の文献上の初出として、明和八年編の観世元章筆『能楽諸家等過去帳』を挙げる。さらに元章が、明和九年に酬恩寺で音阿弥三百回忌法要を執り行うために上京の旅に出た際の行程を浅井織之丞筆『習事伝授書留』から紹介。上京に際して幕府に提出した御暇願いの写しから、訪問予定地が観世

家先祖の墓所・観世家及び能の由緒に関わる故地・観世流のパトロンである堂上や門跡・その他伊勢神宮等であったことを明らかにし、元章の上京が観世家ゆかりの場所と歴代の墓を巡り、自らの家系のルーツを辿る旅であったと指摘する。さらに酬恩寺にある元章の墓碑銘に墓参の記録が見えることから、音阿弥の墓が明和以前から実在していたとする。

近代能楽史については次の四本があり、うち三本は明治の三名人を取り上げたものだった。

宮本圭造「能役者たちの「明治」」(『国立能楽堂』424。12月)は、明治の三名人のうち地方町役者出身の桜間伴馬について。新座大夫・桜間家の先祖は、永青文庫蔵『先祖附』に見える「桜間惣次郎」であった可能性や、桜間家の歴代、幕末に桜間伴馬が金春大夫のもとで出府修行をしたこと等を紹介。明治維新後は、東京で旧藩主に引き立てられ、華族能が盛行したことを素地として、旧公儀能役者と上京した役者が能楽復興を実現させたとする。また、東京の能界から姿を消し廃業同前の体であった金春広成が、桜間伴馬と細川護久の訪問を契機として東京に復帰した事実に着目し、伴馬が金春宗家復活の立役者であった可能性にも言及する。

西村聡「御用達宝生九郎の誕生—能楽「再興」期年譜考証の更新—」(『金沢大学歴史言語文化学系論集　言語・文学篇』10。3月)は、明治九年から十年代前半を対象に、宝生九郎伝と明治能楽史の考証を行った論。まず、明治九年にはじまる宝生九郎の活動再開や岩倉具視邸行幸啓能について、宝生と前田斉泰や梅若実との関係を踏まえて考察し、明治天皇が岩倉の意向で能楽を嗜好したと指摘する。また宝生九郎が金剛舞台にも出演していることに着目し、記録一覧を示すとともに、この出演が梅若舞台に依存する心理的負担を軽減したと分析する。さらに明治十一年の青山御所舞台開きで宮内省から装束料が下賜された意義を能楽再興の始まりと捉え、明治九年に起きた梅若実と観世清孝の確執と解消や陸軍省指揮下の上演にも触れる。

三浦裕子「初世梅若実と横浜の素人弟子—横浜養心会をめぐって(その一)」(『武蔵野大学能楽資料センター紀要』29。3月)は、素人弟子の団体「横浜養心会」を軸に、梅若家と横浜素人弟子の関係を探る論。『梅若実日記』に基づき、梅若家が明治十五年に横浜へ出稽古に行き始めたことや、二と七のつく日に貿易商の茂木惣兵衛宅で稽古が行われたこと、入門者は貿易商人や銀行員であったことを紹介。それらは梅若家に入門する形を取っており、将来的に横浜の素人弟子を六郎に任せるつもりだったことや、素謡会では会員以外の参加も歓迎されていたことについて述べる。

佐藤和道「近代における海外日本人居留民と能楽」(『能と狂言』16。6月)は、海外における能楽享受の実態を検証した論。ロシアのウラジオストクでは、一九一六年末頃から催された松風会謡会の番組・出席者やその職業を明らかにし、官民一体で形成された自治組織の親睦に一定の役割を果たしたとする。上海では、在留邦人の社交機関日本人倶楽部で謡

会が催され、大正期は宝生流が主体であったこと、戦時下においてなお謡曲の享受が活発に行われたと指摘する。アメリカのサンフランシスコでは、南加謡曲会（のち米国観世会）・米国喜多会・北米観世会などが結成され、日本人排斥運動の渦中でアメリカへの恭順を示すため謡会が催され、太平洋戦争開戦後は日本人の仮収容所で謡曲の同好会活動が行われたこと等を報告する。また、このことが戦後アメリカにおける謡曲享受の礎を築くことになったと指摘する。（小室）

【作品研究】

本年に発表された作品研究を、中司・山中で分担して展望する。分担の基準は厳密ではないが、『観世』と『国立能楽堂』掲載分は中司が、『鋳仙』掲載分は山中がまとめて担当している。技法研究は数が少なかったため、一項目を立てず本項の最後で論じている。

まずは世阿弥関係の論からあげる。竹本幹夫「世阿弥時代の能本相伝と作品改作」（『国文学研究』186。10月）は、世阿弥伝書や世阿弥自筆本の分析によって、猿楽諸座が場合によりお互いに「台本の譲渡と上演法の教示」を伴った演目の融通をしていたこと、世阿弥が座中の作品を「一元的に管理」していたことなど、能本相伝の状況を論じる。能本の改作と、小規模の改訂・部分的な加筆訂正の位相の違いを指摘、世阿弥は前者においては書き加えたか否かによって自作とみなし、後者の場合には自作の意識はなかった可能性をあげる。また〈鵜飼〉と〈四位の少将〉の原曲と改作の実態についても考察する。

山中玲子「〈通盛〉前場のシテ・ツレ登場段をめぐって」（『能楽研究』42。3月）は、〈通盛〉の古態を考察した論。詞章の分析を通して前場に老人（通盛の霊の化身）と姥（小宰相の霊の化身）に加え小宰相の乳母の霊が登場しており、僧と積極的に言葉を交わすのは同じ舟に乗った姥と乳母の霊なのではないかとの仮説を提示し、老人は姥登場の後に地獄（修羅道）から浮かび上がってくるという読みを示す。

二〇一八年は西行生誕九百年にあたり、西行研究の視点による論稿もあった。山口眞琴「能〈西行桜〉と『西行物語』『撰集抄』」（『国立能楽堂』416。4月）は、〈西行桜〉が略本系の『西行物語』を踏まえること、『西行物語』第二段の桜花の歌だけでなく梅花の歌を含む春の花歌全体から着想されたこと、『撰集抄』「経信卿花見　値僧連歌」等に見える数寄と仏道を関連付けた説話が前提にあることを指摘した論。同「能〈江口〉とプレテクストをめぐって」（『日本文学』67。7月）は、前場の「西行遊女問答説話」の素材となった、『新古今和歌集』『撰集抄』『西行物語』等の特性と相互の関連性を考察した論。〈江口〉の主題を「西行的なありようから性空的なそれへという、ワキ僧の悟りの過程を描く」としたうえで、〈江口〉に描かれる西行は「ワキの身体を通して、改めて遊女と邂逅」、普賢菩薩を見る奇特を得たと読み解く。それゆえ主題を西行に適応させて捉え直すことができ、〈江口〉の西行

は普賢感得の先例である性空に結縁したと指摘、「時空を超えた結縁物語」としての一面を〈江口〉に見出す。西行をめぐる謡曲研究には、ほかにエリザベス・オイラー「謡曲『西行桜』―西行上人の物象化と神格化―」（ＥＡＪＳリスボン大会フォーラム記録）（『西行学』9。10月）も。

このほか、世阿弥作品関連として以下の論があった。井上さやか「謡曲「三輪」における〈古代〉」（『万葉古代学研究年報』16。3月）は本曲を世阿弥の環境や『風姿花伝』とも深く関わる作品と捉えた論。三苫佳子「世阿弥の女物狂能『桜川』の場面構成―『高砂』との比較から」（『名古屋芸能文化』28。12月）は、老体の序破急五段を基に〈桜川〉の構成を考察した論。齋藤彰「世阿弥の定家受容」（『学苑』927。1月）は〈船橋〉等に見える定家の歌を世阿弥伝書と関わらせて論じたもの。原田香織「作品研究『檜垣』―妖艶美と禅の「汲水論」の表現性」（『東洋学研究』55）は、過去に遡り「若い驕慢の誇りある美女」の姿を描く点に、老女物としての意義を見出した論。

以下、雑誌ごとの特集をまとめて見る。『能と狂言』（16。6月）には大会企画（山中担当の後半で言及）以外の作品論として、高橋悠介「散逸曲〈仏頭山〉の題材と環境」と井上愛「哀傷する墨染桜の精―〈墨染桜〉の素材と構想―」の二本が掲載された。高橋稿は能楽学会世阿弥忌セミナーシンポジウム「中世の南都回帰―政治・宗教・文化と能楽―」を論文化したもの。〈仏頭山〉の内容が聖徳太子伝などに見える、橘寺に千の仏頭が出現した奇瑞を描いたものであると想定、「仏頭出現を視覚的に表現するような、風流性の強い演出」であった可能性を提起する。そのうえで、南都と京都に関わる律宗のネットワークの分析を通して、将軍義政の南都下向という特別な機会において本曲が上演された背景に、室町幕府の祈祷寺の由来に橘寺が関わっていたことを導く。大和猿楽の京都進出に律宗が果たした役割についても触れる。

井上稿は諸本比較や和歌集・歌学書の検討を行い、ワキ上野岑雄の設定とシテ墨染桜の精の造型を論じる。岑雄の詠んだ藤原基経哀悼の歌が、仁明天皇を悼んだ歌とみなされていった伝承の変化や、その変化の要因に遍照による仁明天皇哀悼の歌と伝承が関わること、岑雄の思いが墨染桜の精に投影され、特定の故人を哀傷する感情が舞台に実体化されていることなどを指摘する。

『観世』では音阿弥生誕六百二十年として音阿弥の特集が組まれた。姫野敦子「音阿弥と「小歌舞」」（2月）は『蔭涼軒日録』に見える音阿弥の小歌舞の記事を検討した論であるが、そのほかは音阿弥所演曲を扱った論稿である。これらの論稿は、寛正期において世阿弥以来の形式を受け継ぎつつも新しい趣向の演目が記録に現れてくる状況の解明に、音阿弥の演能活動や彼の所演曲の研究が有効であることをあらためて認識させてくれる。

山中玲子「〈二人静〉―音阿弥の演出・元章の解釈」（3月）は「〈二人静〉の古態―〈一人静〉の可能性をめぐって―」（『能

の演出　その形成と変容』所収）を発展させた論。古態には相舞がなく、菜摘み女一人が舞う「憑き物の能」であったとの自説を確認したうえで、本稿では新たに公開された『小書型付』に見える観世元章考案の「立出之一声」の分析を加える。菜摘女がツレからシテに変わり、現行「立出之一声」とは異なり静の霊が登場しない点をあげ、元章の意図が憑依の視覚化よりもむしろ古態への回帰にあったと指摘。〈二人静〉の初出記録である寛正五年の糺河原勧進猿楽が相舞演出の初演であった可能性を検討し、音阿弥の関与が相舞の導入だけにとどまらず、曲舞部分も含めた改作にも拡大できる見通しや、音阿弥が観阿弥作品を演じる傾向も新たに指摘する。

小田幸子「〈三井寺〉―鐘と夢告のモチーフ」（5月）は、音阿弥と息子正盛にとって極めて重要な寛正五年の糺河原勧進猿楽の初日、最初の女体能として〈三井寺〉を上演していることに注目したうえで、〈三井寺〉を古作の物狂能ではなく新しい物狂能と想定。新趣向として、有名な三井寺の鐘を模した作リ物を実際に撞く画期性、鐘の形態や撞き方が現実に近い演出であったこと、「夢見―夢告―夢合せ―三井寺へと出立」場面の過程・順序が物語や説話の参籠通夜の様子と共通し、類型に則って母の切実な心情と再会の期待という過程をリアルに描くことをあげる。

音阿弥の芸風をめぐる論は『中世文学』にも。天野文雄「「二人の三郎」からみた室町時代「能作」史―世阿弥と音阿弥の芸風と芸道理念から―」（『中世文学』63）は、義教の見物した多武峰様猿楽等の芸能上演記録や音阿弥所演曲の検討などを通して、音阿弥の芸風理念が世阿弥とは異なることを論じる。音阿弥所演曲に四・五番目物や「動きのある「強い能」」が多いことなどから、彼の所演曲には将軍の「嗜好」が反映されていると指摘。「世阿弥とは対極的な風流能」を作った信光の作風が、父音阿弥の芸風を継承したものであると想定し、『観世小次郎画像讃』を読み解き、音阿弥が「風流能的な曲柄にたけた役者」であったことなどを導く。

信光の作風に言及した論に続けて、ここで、新たに信光作品を提示した論稿をあげておく。樹下文隆「《布袋》と《龍虎》―禅文化が生んだ吉祥思想」（『かがみ』48。3月）は、これまで近世の成立と見なされていた〈布袋〉を観世信光作と提起。近世に流行した七福神信仰の影響が見えず、『景徳伝灯録』に基づきつつ他の高僧の逸話も加え独自の布袋像を描くこと、先行する能の表現を摂取した文飾や、〈輪蔵〉と同様に弥勒の化身である布袋が楽を舞う演出、童子が布袋の舞を導くという「物語の視覚的展開」をうながす演出等に信光作の特徴をあげる。本曲と同様に近世の成立と考えられてきた曲にも、再考を要するものがあると思われる。

再び『観世』に戻るが、西谷功「〈舎利〉―泉涌寺との関わり」（10月）は、音阿弥所演曲を仏教美術の視点で論じたもの。泉涌寺が仏牙舎利や韋駄天信仰等において「宋朝文化を可視化・具体化する「場」」であったこと、〈舎利〉が「公武政権の宋朝への意識・憧憬にともなう模倣としての仏牙信仰を精

神的、儀礼的に支える」目的で制作されたことなどを指摘。義教暗殺後、庇護を失った音阿弥観世座が新たに寺社との関係を深める状況下で制作された可能性も提起する。

西谷稿は能楽研究所の共同利用・共同研究拠点「能楽の国際・学際的研究拠点」における共同研究「能作品の仏教関係語句データベース作成と能の宗教的背景に関する研究」の成果論文の一つであるが、同共同研究の代表者高橋悠介にも「能楽に摂取された法華・阿弥陀・観音融和の偈句―「昔在霊山名法華」偈の源流と展開」(『画期としての室町　政事・宗教・古典学』前田雅之編、勉誠出版)がある。表題の四句偈を用いる能や能以外の作品の分析によって、この偈が観音利益に関連する文脈で使用されることなどを指摘。「昔在霊山名法華」偈について「複数の源流を持つ偈句が鎌倉時代、観音信仰を核として縒り合され、形成された」過程を明らかにし、従来の注釈書等で指摘されるように南岳慧思に関わる偈ではなく、「諸尊・諸信仰融和」の表れたものであると説く。禅竹が諸信仰を猿楽の神として翁に包括していく際に、この偈句を用いていることは象徴的な事例であるとも述べる。

『国立能楽堂』の特集では、作品論が例年よりも多く掲載された。宮本圭造「『万葉集』と能」(3月)は、〈船橋・三山・求塚〉等の典拠が、後代の歌学書の引用する万葉歌や『万葉集』を踏まえた物語であると論じ、〈求塚〉の直接の典拠として、二人の男の名などが能と一致する『詞林采葉抄』を新たに提示する。また「石河の女郎の能」について、『万葉集』に見える「恋多き女性」としての石河女郎のイメージや、『恋の立合』の一節を含み恋の恨みが主題の一つであったらしいこと、本曲と共に「元雅が晩年に取り組むべき能」と位置づけられる「千方」が鬼能と想定されていることなどから、「恋の執心をテーマとした鬼がかりの能」であった可能性を述べる。重田みち「禅と能―《放下僧》の周辺―」(5月)は、遍歴する禅の宗教芸能者の姿を〈放下僧〉のシテ・ツレに求め、「不立文字」等の詞章及び内容に見える禅の思想を説く。藤井一二「大伴家持と越路の水海―謡曲「藤」と歴史舞台―」(7月)は、布勢水海や藤を素材とした『万葉集』の歌をあげ、藤の花が波に影を映す情景が布勢水海と切り離せないモチーフであるとする。天野文雄「二つの『竹生島』女体とその来歴」(10月)は、喜多流と金剛流〈竹生島〉の小書「女体」の来歴を明らかにした論。小林健二「室町期文芸における「調伏」の諸相」(11月)は、能や幸若舞曲・物語絵巻・説経の諸作品に共通する要素として、調伏が物語のターニングポイントになる点、壮絶な調伏の有様が描かれる点、調伏によって仇討ちが約束される趣向をあげる。(中司)

『能と狂言』には前述の二本に加え、二〇一六年度の大会企画「風流の作り物　能の作り物―中世の作り物文化から能を見る―」に基づく論考として、青盛透「中世民衆の拍子物と作り物」、小田幸子「能の作リ物―演出との関わりを中心に―」、中嶋謙昌「作り物図と現代の能―台輪・鐘楼・蜘蛛塚―」の三本を掲載。併せて松尾恒一・青盛透・小田幸子・

中嶋謙昌・観世鉄之丞・宮本圭造（司会）による「全体討議」の文字起こしも収める。青盛稿は『看聞日記』をはじめ諸記録を読み解き中世民衆の風流の実態を明らかにする。社会階層による風流の素材・技法の違い、拍子物と風流の区分、風流作り物のあり方、拍子物に付随するヲドリのことなど、史料を目にしただけでは門外漢には区別がつきにくい用語の問題をはじめ、風流の本質に関わる多くの重要な論点が明快に説かれており、非常に勉強になった。一方、小田稿は、常に目に触れ十分に馴染んでいる「能の作リ物」についての考察なのだが、「演劇学の課題としても作り物は面白いテーマ」と捉え「できるだけ演劇一般を視野に入れ」た論述がされているため、「人の手で運搬する」ことが「根本要件」とされたり、「作り物を出しても出さなくてもかまわない」という姿勢が指摘されたり、能だけを見ていると当然と思われることに新たな光が当てられるのが新鮮で、視界が広がる快感を覚えつつ読んだ。ただし、後半で述べられる「乗リ物」を動かした可能性については、その方法が判らないので、説得されるには至らなかった。中嶋稿は、大会当日は観世銕之丞氏との対談の準備として具体的な例を挙げることが目的だったと記憶するが、本稿では台輪の寸法の定型化、〈三井寺〉の鐘楼の小型化、〈土蜘蛛〉の蜘蛛塚の張り方のバリエーション、それぞれ確実な情報を示している。

この年は『銕仙』の「研究十二月往来」にも作品論が多く並んだ。上演当日に配布される冊子という性格を反映して、舞台上で演じられる演劇として能作品を捉え、一曲の描く世界や登場人物の人物像に迫るスタイルのものが多い。小田幸子「起こらなかった奇跡」（678。2月）は〈弱法師〉の詞章からクライマックスに向かって俊徳の開眼への希望が高まっていく過程を読み取ったうえで、俊徳丸説話の中で唯一開眼しない本曲結末の意味を問う。同稿と併せて読みたいのが、三宅晶子「若い人の死を扱った〈朝長〉と〈隅田川〉」（681。5月）で、両曲には修羅能と物狂能というジャンルの違いを超えて登場人物の役割や構造、特に救いのない結末に共通性があること、結末部に関しては同じく元雅作とされる〈弱法師〉〈盛久〉にも同様の傾向を見て取れることなどを説く。両稿者の関心や方向性は異なっているにもかかわらず〈弱法師〉についての理解がほぼ一致する点も興味深かった。

宮本圭造「能〈項羽〉のツレ虞氏は必要不可欠か」（685。9月）、伊海孝充「佐野常世の痩せ馬」（687。11月）も、舞台上で演じられる能として作品を捉えたうえでの論と見えた。宮本稿は、〈項羽〉後場の後シテ・ツレ登場段「紫の雲間横切る出立は、天つ少女の調かな」を虞氏と結びつける従来の解釈に疑義を提示。「ワキの読経による極楽往生の奇瑞」と解すべきとする。また、ツレの役割があまりに少ないことからツレに〔破ノ舞〕を舞わせる近年の工夫を「曲解」と退け、むしろ「ツレ虞氏の姿を完全に排除」した「一種の修羅能として」の演出を提案する。伊海稿は、漢詩における「痩馬」が「困窮の象徴であると同時に、〈官〉の世界から孤立してし

まった姿の隠喩」であることを示したうえで、能〈鉢木〉後場冒頭、シテの佐野常世が一人痩せ馬に跨がり鎌倉を目指す登場段が「常世の人物像と境遇を舞台上に立体化させる場面」として一強の趣向を色濃く反映する重要な場面であることを説く。

テキストの修辞や素材、成立の背景等を探る論ももちろん健在。岩崎雅彦「《水の月取る猿》と猿沢の池―能「采女」の修辞」（682。6月）は、仏教（及びそれに基づく和歌）では本来「実体のない物を捉えようとすること」を表す「水の月取る猿」が、能では「高貴な人に対して身の程をわきまえぬ感情を持つこと」へと変わっていることを指摘。さらに、「猿沢」の名を持つ池が室町時代に月の名所として知られていたこと、采女が猿と同じく水に落ちて死んだこと等、〈采女〉にこの表現が使われた背景を探る。竹本幹夫「能〈熊坂〉小考」（683。7月）は、永享四年に矢田猿楽が演じた『九郎判官東下向』が〈烏帽子折〉ではないという内山美樹子氏の説に従い、同曲を〈摂待〉に比定したうえで、〈烏帽子折〉と〈熊坂〉の前後関係や幸若舞との関係等を考察。〈熊坂〉は「説話的な独自性をほとんど能〈烏帽子折〉に負って」おり、「その影響下に成立した可能性」が高いとの結論を導く。

高桑いづみ「夕顔―前シテの登場と後場の舞」（686。10月）は、音楽面からのアプローチ。〈夕顔〉の前シテ登場段や舞の前後の小段構成が特殊であることを、広く他曲の例にも目を配りながら丁寧に説く。［ワカ］の小段で末句を繰り返す形と『今様之書』に見える白拍子舞との関連は、評者も昔から唱えていることで異議はないが、三回繰り返しから二回繰り返しへという変化や［ワカ］の拍子合・拍子不合の違いなどについては、それほど単純に一直線に並べられないのではないかとの疑問を感じた。とはいえ、〈半蔀〉や内藤河内守作〈夕兒ノ上〉との関係が不明確な〈夕顔〉作者を「前シテの登場といい、舞あとの謡といい、能の構成を熟知した上で定型を外した」人物と捉える視点は新鮮で、大いに刺激を受けた。

若い人の論も一本。鵜澤瑞希「世阿弥自筆本〈柏崎〉にみる父と子の絆」（684。8月）は、武家の父子の間に見られる「肉親の愛情を越えた、武士としての命がけの強い絆」の例を軍記物語や能の散逸曲等から集め、自筆本〈柏崎〉を同様の視点から読み解こうとする。同時代の他ジャンルの作品を博捜する手法には賛同するし、寛正六年の〈鶴次郎〉や『申楽談儀』に引かれる散逸曲に「父と子の強い絆」が見られるという指摘にも納得するが、自筆本〈柏崎〉の具体的な読解には首肯できない点もあった。「捨身の行、世に越えて候ふほどに」という花若の姿は現行の花若とそれほど違うだろうか。物狂が母だと気づき「人目の隙を計らひて名のらばや」という花若の台詞を「修行の妨げとなる母を捨てようとしている」と読むのは正しいか。まして、自筆本が描こうとした家族像が母子物狂の類型から外れていたため後代に踏襲されなかったという見通しは、いささか強引ではないだろうか。「十二月往来」という少ない字数での考察であり、十分に論が尽くせな

かった点や、銕仙会の上演曲目に合わせるための無理があったかとも推測している。「武家の父子の絆」という視点はとても興味深いので、じっくりとまとめてほしいと思う。

『銕仙』から離れるが、若い人の論をもう一編紹介する。井上愛「待謡をめぐる考察―世阿弥作品を中心にして」（『明星大学研究紀要（人文学部・日本文化学科）』26）は、待謡に注目し、夢幻能のあり方を再考しようとするが、結論はあまり明確には述べられていない。むしろ、待謡の流動性や、弔いの待謡が仮寝の待謡に移り変わっていくことなどが個々の待謡詞章にそって検討される。このようなアプローチの場合、各作品についてすでに知られていることの再説が多くなるのは仕方のないことで、それらをもう一度まとめ直し俯瞰することで見えてくるものを探ろうという志は意義あるものと思うが、そのためにはあともう少し何か新しい切り口を見つけて掘り下げてほしかった。たとえば「不思議について思うワキの視点」についての指摘など、ぜひ詳細に論じてほしい。こちらも続稿を期待したい。

大槻能楽堂で発行する『おもて』にも、「能苑逍遙」（73・74・75）として、天野文雄による作品研究的な論が掲載された。「《源氏供養》の紫式部はなぜ烏帽子を着けているのか」（『おもて』135）は、紫式部の烏帽子姿の背景に、白拍子出身でありしかも「源氏供養の法会」を催して「源氏講式」を書いたことが知られる藤原実材母の存在を見る。「《三輪》の「作意」、その総合的な把握」（同136）は、同曲の主題が「俗塵に交わって衆生と同じように苦しみを受けている神による衆生済度」であり、衆生済度という点では神と仏は対等と主張する作風を禅竹のものとする。「護法型再考」拾遺（同137）は、〈養老〉が本来「護法型」の能であったとする根拠として、山神の出現は霊泉が湧くようなめでたい御代を祝福するためであり、「その場には勅使とともに霊泉を発見した樵夫親子がいなければならない」ことを挙げる。

技法研究の論は少なかった。横山太郎「近代能楽のわざと表現（五）（六）」（『観世』1月・3月）は前年から続いた連載の完結編。明治期の家元や名人たちが自らは臨機応変の演技に長けていながら「基本の型に忠実たるべき」ことを主張する「言行不一致」について、「江戸時代の社会的抑圧にかわる理念的な抑圧」を設定することによって「真に自由なわざの創出」を産み出すための工夫と捉え、さらに、次の世代（観世元滋や喜多実以降の世代）は、より意識的に「言行一致」の姿勢で流儀の型を整え、「わざを明確に記述して広く流通させるメディア」として流儀の型付を整備していったという流れを示す。こうした結論自体はすでに昨年分の論考の積み重ねから想定できるものだが、「流儀の型付」の整備によって「基本の型を守る」という「能らしさの理念」が実体化した先に「わざの変化」ではなく「身体の強度」によって観客と向かい合うスタイルが生まれてくるという見通しもまたたいへん興味深い。素人の稽古からのフィードバック、玄人と素人との関係など、引き続き20世紀の能楽についての分

析を期待する。

論考ではないが、田村良平（村上湛）「復曲能〈星〉の再考・新演出について」（『明星大学研究紀要』26）も挙げておきたい。二〇一七年二月に「大槻能楽堂八十周年記念特別公演・観世小次郎信光没後五百年記念」として、「信光作もしくは改作」と考えられる〈星〉を復曲した際の記録で、登場人物・扮装・作リ物・上演詞章・型付が詳しく記されている。復曲や新作が一度限りのイベントとして終わるのではなく次へと繋がっていくために、こうした記録と公開は非常に重要なことと思われる。面倒な作業ではあるが、この方式が広まっていくことを願いたい。（山中）

【狂言研究】

まず資料紹介・資料研究から。佐藤友彦・田﨑未知・野崎典子・林和利・安田徳子・米田真理「狂言共同社『秘傳聞書』翻刻（九）」（『名古屋芸能文化』28。12月）は、和泉流山脇派の伝書『秘傳聞書』の翻刻の連載。今回は「秘傳聞書　肆」の下の翻刻。邯鄲・鮹・八尾・七騎落・百万・花月・絵馬・大仏供養・雷電・猿聟・三番叟などに関わる記事。山本晶子「馬瀬狂言資料の紹介（10）―「鴈礫」―」（『学苑』929。3月）も連載の資料紹介と考察。今回は「馬瀬文化二年本「鴈礫」」と「馬瀬中北本「鴈礫」」を扱い、両本と和泉流台本との構成の相違をまとめた詳細な表を付す。前者が「鶯」を取り入れた独自の展開を有する資料で、後者が現行の詞章に繋がる資料であることを指摘し、今後の馬瀬文化二年本研究の展望を示している。坂本清恵・川上真由子・林美樹・シラージ　アンドレア「大蔵流茂山家狂言台本翻刻」（『日本女子大学大学院文学研究科紀要』24。3月）は大正から昭和初期に書写された日本女子大学日本文学科蔵「大蔵流茂山千五郎家台本」二十七冊のうち、鶏猫・二十九・呂蓮・長光の翻刻。

歴史的研究は一本。茂山忠亮「阪神能楽組合に見る能楽界の変革と戦時体制：狂言方　茂山久治の活動を中心に」（『Core Ethics』14。）は、大正十二年に組織され第二次世界大戦中まで存続した阪神能楽組合の活動について、組合長も勤めた茂山久治（後の善竹彌五郎）を中心に追う。朝日会館に注目し、能舞台からホールへと活動の場が広がる過程を分析するなど、これまでの近現代能楽史研究とは異なる視点も提供している。〈忠霊〉の大蔵流間狂言に関する記録も貴重。

本年は、作品研究が比較的多かった。田口和夫「〈佐渡狐〉の袖の下、再論」（『銕仙』677。1月）は〈佐渡狐〉が作られた当初になかった賄賂を渡す演出についての再論。最も古い趣向をもつ『狂言記拾遺』から、奏者の活躍が増えた享保保教本、袖の下の演出が加わる明和中根本、安永森本、寛政有江本の記述を辿りながら、この演出が江戸時代中期に鷺流仁右衛門派で工夫され、和泉流で推敲されたと結論付ける。岩崎雅彦「『直談因縁集』と狂言―「磁石」の場合」（『中世文学』63。6月）は〈磁石〉の典拠・構想の研究。前半の人売り説話

の典拠としては、『わらんべ草』以来、『沙石集』と考えられてきたが、会話文を多様する『直談因縁集』の方がより〈磁石〉に近く、演劇的だと把握し、『沙石集』と〈磁石〉を直接的に結びつける必要がないことを指摘する。その上で、この説話を磁石説話に接続させた狂言作者の構想を分析する。唱導資料と能狂言の緊密さはすでに多くの研究が指摘するところだが、そうした素材をどのように劇化したかという研究は、今後も望まれるだろう。大谷節子「狂言「八句連歌」の「をかし」―狂言と俳諧連歌―」（『国語と国文学』95―9。9月）は〈八句連歌〉の古態と考えられる天理本をもとに、連歌の水面下の借手と貸手の暗黙の了解、俳諧連歌に式目を持ち込む諧謔性、借手の「やさしの人」としての性格などを読み解く。さらに、借金をめぐる「俗」の物語として一貫する虎明本、天理本の要素に虎明本の要素が混在する保教本と、本曲の変遷を追う。〈八句連歌〉ほど巧妙ではないが、表裏の二面の意味を持つ言葉の面白さを主眼とする狂言としては、現在演じられていない天正本〈近衛の申状〉を思い出す。こうした趣向が、室町期の狂言を考える上で重要であることを再認識させてくれる論。原田香織「狂言『悪坊』における頭陀行」（『文学論藻』92。2月）は類曲〈悪坊〉と〈悪太郎〉の比較論。前者が六角氏を意識した叡山文化圏が土壌にある教化譚としての趣きがあるのに対し、後者は土師寺を意識した浄土宗信仰圏に基づいた念仏の芸能性に重きをおいた曲と解釈する。首肯せられる見解もあるが、長刀を僧兵と結びつけるなど、すべての要素を前述の解釈に当てはめる手法に無理を感じる箇所もあった。同氏には、『狂言記』を最古本とする〈左近三郎〉を禅問答に主眼のある宗教劇として読む「狂言『左近三郎』における禅風問答と戒律」（『国際禅研究』1。2月）もある。左近三郎が鹿を狩る猟師であることに気づいたところから始まる、禅僧との峻烈な対立を禅関係の資料・物語を援用しながら読み、『信心銘』などを盾に職業的殺生の問題を問う左近三郎に対して、宗教者としての威厳を示す禅僧という対立劇を作り出している点に、この曲の新味を指摘する。原田稿とは別の読み方を示唆するのが、山本佐和子「京都大学文学研究科図書館寿岳文庫蔵「古則聞書零本」翻刻・解説」（『同志社国文学』88。3月）である。大徳寺派系密参録についての講義の聞書である「古則聞書零本」（元和七年写）を紹介する中で、第一則目「趙州栢樹」の引用歌が〈左近三郎〉のそれと一致する点に注目し、この曲が密参禅を風刺した作品である可能性を指摘している。山本稿を踏まえるなら、密参録がどのような経路で『狂言記』に流入したのか、さらに考えてみたくなる。内山弘「狂言「庭鳥む子」の形成―謡の言語遊戯を手掛かりとして―」は、氏が精力的に進めている天正本を中心とした作品研究で、天正本「庭鳥む子」の謡部分に着目して他台本〈鶏智〉と比較する。前者の謡が「き」「ける」の多用し、かかりの木を読み込むなど言語遊戯を駆使して蹴鞠を巧みに読み込んでいると分析する。さらに、右の謡は能〈遊行柳〉に発想を得ており、鶏合の趣向は

副次的なものに過ぎないと結論づけている。蹴鞠に関わる言語遊戯があるという指摘は納得いったが、「桜柳をこき交ぜて」などは有名な句だけに、〈遊行柳〉の影響だけを読み取るのには異論もあるだろう。藤岡道子「狂言「木六駄」の謎と絵画」（『東洋哲学研究所紀要』34。12月）は〈木六駄〉の発想を絵画に求める論。主人が太郎冠者一人に牛十二匹の運搬を頼むことを「謎」と定義し、民俗芸能にあった牛追いの雑芸を核にしながら、「現実にはない現実を描く」虚構としての愉悦を読み解く。さらにその発想は、牛と牛飼いの絵画の歴史が影響している可能性を問題提起する。興味深い提起であるが、〈木六駄〉を十牛図などと関係づけるのは難しいのではないだろうか。木村信太郎「〈酢薑〉考―天正狂言本と江戸前期狂言台本諸本に見る―」（『法政大学大学院紀要』80。3月）は台本比較から、〈酢薑〉の語リの機能を考察する論。天正本と江戸時代初期台本を比較して、薑への改変・振り売りへの改変・系図語りの後の改変・留めの改変は、酢と薑の関係の深さとその言葉遊びに起因すると指摘する。それを踏まえ、天正本後の台本の語リは秀句争いに接続することで、その酢と辛の言葉遊びの遊戯性や躍動感が増幅していくと考察する。自身の主張と先行研究の差異がわかりにくい。鈴木靖「狂言「附子」の類話の伝来について」（『能楽研究』42。3月）は敦煌写本『啓顔録』と〈附子〉の関係を指摘した論の続稿。『沙石集』所収説話と中国の物語の比較をもとに、大陸において、〈附子〉類話が民間伝承を介して後代の文献に流布したことを指摘する。さらに、十三世紀末から十四世紀初に、無住周辺の渡来僧や様々な商いを営む唐人がもたらした中国民間伝承が、『沙石集』に収まるに至ったと推測する。以前は昔話研究、近年では説話研究で東アジアの物語との比較研究が実践されているが、狂言にもこの視点が必要なことを痛感する。浜田泰彦「見物左衛門とその子孫たち―狂言から黄表紙・歌舞伎へ」は、近世文学における〈見物左衛門〉の変遷を追う。黄表紙『東都見物左衛門』では見物左衛門の一子見物太郎の物語となり、京から江戸へ、花鳥風月の趣向から遊郭譚へと変わるが、失態続きの父の姿を継承する。一方黄表紙『〈夫京都／是東都〉見物左衛門』・歌舞伎『洛陽見物左衛門』では、見物左衛門の性格や物語の設定が大きく乖離すると指摘する。

作品研究ではないが『楽劇学』（25。5月）には大会「日本の芸能における獅子」の記録の一つとして、網本尚子「狂言の獅子」、例会記録「狂言「楢山節考」をめぐって―野村万作氏・深田博治氏に聞く」（聞き手：小田幸子・児玉竜一）が載る。前者は〈越後聟〉〈獅子聟〉の基本情報、後者は万作氏による〈楢山節考〉再演後のインタビューで、小田氏による同曲の歴史のまとめを冒頭に付す。なお『武蔵野大学能楽資料センター紀要』（29。3月）の公開講座・能楽研究講座・入門講座（テーマは「今年はひたすら狂言です。」）の記録は誤って二〇一七年の研究展望で扱ってしまった。お詫びして訂正する。

間狂言研究には飯塚恵理人の連載が二本ある。「《采女》試解―間狂言詞章と小書き―」（『紫明』42。3月）は、《采女》の要素を春日明神の神徳・采女身投げ譚・采女の成仏・御代の賛嘆の四つに分けた上で、間狂言が語る要素を表にまとめる。小書「美奈保之傳」を踏まえる副言巻以外の台本は、明神の神徳に重きがあるという指摘は、間狂言の機能を考える上で興味深い。「間狂言及びワキの狂言応答詞章から見る《雲林院》の骨格」（同誌43。9月）も同じく間狂言台本の比較。間狂言台本は『伊勢物語』の成立や業平と雲林院の桜の関係について記しているが、『副言巻』のみアイが雲林院まで花見に行く経緯を語る劇中劇になっていることを翻刻とともに示す。

日本語学・言語学からのアプローチによる論考は、毎年コンスタントに発表されている。坂詰力治「漢語の品詞としての広がりについての一考察―室町時代の三大口語資料を中心に」（『近代語研究』20。3月）は漢語の品詞の広がりを検討する材料として、虎明本を用いている。虎明本の場合、サ変動詞を付す変化は日常語として浸透している漢語に見られるなどの指摘がある。同誌には、小林千草「成城〈乙〉本「縄ない抜書」の資料的性格と言語」も所収されている。本稿は、成城大学図書館蔵『狂言集』に関する一連の研究で、和泉流台本の「成城〈甲〉本」と対をなす〈乙本〉所収「縄ない抜書」（太郎冠者の語り部分の抜書）を、雲形本・波形本と比較し、用語・語法の差異を指摘していく。それらの差異には、書写年代の違いや演劇的効果の違いなど、位相が異なる要素が混在しているため、台本としての特徴が把握しづらかった。同氏には同資料に基づく「成城〈曲章四番〉本所収「呪詛男」の性格と表現」（『湘南文学』53。3月）もある。セリフの分析や八右衛門派台本「呪ひ男」との比較を通して、本資料「呪詛男」が入念な場面配置を施した立体的なドラマとなっていると結論づける。大倉浩「狂言資料の特性と文法」（『訓点語と訓点資料』140。3月）は、「オジヤル／オリヤル」「マラスル／マスル」の用例から、狂言台本の変遷を分析する。古い語の「オリヤル」、新しい語の「マスル」に統一される大蔵・和泉の台本の変遷と『狂言記』の大蔵流類曲と和泉流類曲の分類を重ねて分析することで、『狂言記』所収曲の特徴を捉えようとする。能楽研究者とは異なるアプローチから、『狂言記』の成立背景に関する視点を提示している点は、大変興味深い。ただし、そもそも『狂言記』を「狂言稽古用に弟子が個人的に写したものや、廃絶した群小狂言諸派の狂言台本などを、書肆が雑纂したもの」と把握する出発点自体に異論もあるのではないだろうか。

本年は教育関係の論考も多かった。三宅晶子「小学校で教える狂言」は小学六年の国語教科書で《柿山伏》を読み物として教えられることへの問題提起。映像などを用いた舞台鑑賞の重要性を指摘する。三宅稿の問題提起を実践したのが、小林和馬「「見ること」を重視した小学校の伝統的な言語文化の授業―狂言の体験を通じて―」（『教育デザイン研究』9。

1月）である。古語の壁を乗り越えるための伝文教育とそれに視覚情報を併せることの効果を示しつつ、実際の授業の反響や効果を整理し、教育効果だけでなく伝統文化との出会いという意義があることを指摘する。小学教科書に取り上げられた狂言演目数の情報なども有益。ウィリアム　ペトルシャック・飯塚恵理人「英語圏留学生向け狂言教材の作成―「六地蔵」を素材に―」（『名古屋芸能文化』28。12月）は狂言方和泉流佐藤友彦氏の上演台本を底本とする〈六地蔵〉の英訳と考察。前号につづく二つ目の英訳。都会人を装う間抜けな悪役と実直な田舎者との対峙というアニメのような筋立てが、英語圏留学生にも理解しやすいとまとめる。植松容子・山本晶子・五十里美歩・太田くるみ「「やさしい日本語」による狂言の紹介―日本語学習者を対象とした冊子作成の試み―」（『日本語教育方法研究会誌』24-2。）は留学生に狂言の魅力を伝える冊子作りに関する報告。「やさしい日本語」を用いる方法性や被調査者の関心のポイントなどが整理されている。簡潔な報告書なので紙面の都合があったのかもしれないが、「やさしい日本語」の内実や調査結果の「特徴的な登場人物」などの項目についての説明が淡白で、内容がよく把握できないところがあった。渡邉真一郎「多媒体表現活動におけるコミュニケーションを発展させるための授業構成の視点―〈狂言〉を教材とした事例分析を通して―」（『学校音楽教育研究』22。）は「多媒体表現活動（音を含む種々の表現媒体を同時に使用する表現活動）」を通じて音楽の授業におけるコミュニケーション能力を育成する具体例として、小学六年生対象に〈柿山伏〉を扱った授業の報告と分析。狂言を教える授業ではなく、あくまでも狂言は音楽の授業の教材の一つであるので、教員の解釈をもとに「漸次加速」などを意識させることに意味があるのかもしれないが、能楽研究者の立場からは、折角狂言を扱うのであれば、「本物」を味わう時間でもあってほしいと思う。佐藤智広「絵本化された狂言作品に関する一考察―保育指導の可能性を視座として」（『昭和学院短期大学紀要』55。1月）は、誤って二〇一七年の研究展望で扱ってしまった。お詫びして訂正する。（伊海）

【その他】

■受容

能楽受容に関する研究では、三島由紀夫『近代能楽集』と原拠の能の関係を論じる論文が毎年のように見られる。今年は『石川工業高等専門学校紀要』50号が、吉本弥生と佐々木香織による『近代能楽集』共同研究の成果として2本の論文を掲載した。吉本「現代に生きる「葵上」の世界」は三島「葵上」の六条康子の人物像を、情念というキーワードで読み解く。佐々木「謡曲『葵上』におけるシテ一人主義」は、本説『源氏物語』から能が構想される過程に「名もなき庶民の心性や思潮が現れている」という民衆思想史的立場から、能《葵上》を扱う。論文前半では古式からの人物削減に野上豊一郎のいうシテ一人主義傾向を見て取り、後半では、本作が

拠った調伏譚の説話類型が池見澄隆の提唱する冥顕構造という中世民衆の世界観の枠内にあることを述べる。特に後者は興味深い視点だと感じたが、いずれも《葵上》という個別の作品ではなく、一定の作品群へ適用して検討すべき説であろう。

能楽学会学会誌『能と狂言』16号には、「ポピュラーカルチャーと能楽」の小特集。これは２０１７年度能楽学会大会において開催された同名のトークセッションに基づくもので、特にアニメーションにおける能楽や世阿弥能楽論の受容がトピックとなった。横山太郎による企画概要説明の後に、講演者2名による発表内容が掲載される。一つは、『マクロス』シリーズで知られる日本を代表するアニメーション監督の河森正治による「アニメーションと世阿弥の「花」」。河森は自身の分野に引き寄せて、世阿弥の『風姿花伝』からどのような示唆を得たのかを語る。たとえば、かれがアニメーション表現の世界で追求する意識の変性状態（スポーツで言うゾーンに入る状態）の経験について、能は演者も観客も「こういう状態に入りやすいように、いざなわれるように巧みに設計されている」と述べるなど、独自の能に対する洞察が披露されている。もう一つは平林一成による「能とアニメーション――川本喜八郎・押井守・河森正治」。川本喜八郎の『火宅』、押井守の『イノセンス』、河森正治の『マクロスF』の3作品について、それらが能をどのように摂取したかを論じる。《求塚》の翻案、『花鏡』の引用、『風姿花伝』物真似論の作品構造への取り込みなど、方法は様々だが「アニメーション作家が能と接点を持った瞬間、珍しき「花」ともいうべき、意想外の発想や演出プランが生み出される」と指摘する。

天野文雄「近代日本の能楽観とその溯源（その3）――「能の美」ということをめぐって」（『舞台芸術』21号）は、近代以降に能界の外部が「能の美」をどのように認識したのかを概観する。ポール・クローデル、ノエル・ペリ、アーサー・ウェイリーのような外国人、英語圏でも活躍した詩人野口米次郎、美学者阿部次郎らの言説に共通するのは、冷めた美的体験を能のうちに見いだすことである。それは、俳優が感情を外に表現してそれに観客が同一化するような演劇とは異なるものだ。天野によれば、こうした「能の美」は、世阿弥と観世寿夫に挟まれた六百年の間、能界の「内」からは言説化されず、その認識を獲得するには近代における「外」を必要とした。

ノエル・ペリについては、坂東愛子「ノエル・ペリが残した近代の文化交流――オペラから能楽への軌跡」（『武蔵野大学能楽資料センター紀要』29号）があるが、前号の「研究展望」で紹介したのでそちらを参照のこと。

■新作能

西野春雄「新作能の百年（3）」（『能楽研究』42号）は、前稿（1、2）に続く12年越しの続編で、高浜虚子作《鐵門》の作品研究を中心とする。西野は、２０１６年の京都観世会による同作の復曲に参加したのを契機に調査を進め、作品誕生までの詳しい経緯を明らかにし、また『未刊謡曲集』未所収の

新テキストを発見した。これは大正5年に繰り返された試演のためのテキストの最終版で、先行バージョンとは異なり複式夢幻能形式に整えられている（さらにこの後、昭和16年に改題されて《善光寺詣》が書かれた）。本論文末尾にはこの新本文が全て掲載されている。西野はまた、本作が扱う不条理な死というテーマの現代的意義を評価したうえで、こうした「意義ある新作能」の条件を明らかにするために、能勢朝次による新作能論を紹介し、それを踏まえて今後の新作能作品が備えるべき六つの要件を提言している。

『武蔵野文学館紀要』8号は、特集「土岐善麿の校歌と新作能」を組む。喜多実とのコンビで近代の新作能史に大きな足跡を残したのが土岐善麿である。岩城賢太郎「喜多流「綾鼓」の成立と土岐善麿・喜多実協同の新作能創作――喜多流の戦後復興との関わりから」は、まずこうした土岐の能の創作の背後に神田豊穂の存在があったことを指摘。その上で、戦後間もなくの時期の土岐の作能活動を代表する改作能「綾鼓」について、元にした宝生流現行曲からの詞章・演出の変化を検討した。それは大衆への普及を志向したものだったが、この背後には、戦災で焼失した喜多流能舞台の再建と、新時代に対応した能の発展への流儀全体の意欲があったという。最後に戦中の新作能との違いに触れる。特集には土岐の学校校歌の作詞活動についての論考と校歌一覧も含まれるが、能とは直接関わらないので言及するにとどめる。

羽田昶「新作能〈鷹姫〉〈鷹の泉〉上演記録」（『楽劇学』25号）は、楽劇学会例会で配布した資料を再録したもの。W・B・イェイツの『鷹の井戸』に基づいた横道萬里雄の新作能《鷹姫》《鷹の泉》の初演以降の全公演記録をまとめている。

■能舞台

能楽社の芝能楽堂を明治36年に移築した靖国神社能舞台について、建築学の立場から検討したのが、辻槙一郎「近代能楽専用施設の観客席における領域区分の変容過程――靖國神社能楽堂の観客席の改修に着目して」（『日本建築学会計画系論文集』745号）。靖國偕行文庫所蔵の図面・文献資料を主に参照し、移築前の芝能楽堂とも比較しながら、改修プロセスの中で観客席がどのように変化したのかを定量的に分析している。辻はこのプロセスから、近代劇場に共通する鑑賞環境の機能的均質化と、個人客・学生といった多様な鑑賞者に対応する特殊解との両傾向を読み取り、「従来の階級社会にはない新たな観客層を開拓しようとする、能楽専用施設特有の近代的な意識の表れ」を読み取る。

もう一つ、奥冨利幸「大連能楽堂の沿革と空間構成について――海外に建設された能楽堂に関する研究」（『学術講演梗概集・建築デザイン発表梗概集』2018年度大会（東北））は、植民地の能楽堂として代表的な存在である大連能楽堂・大連能楽殿の空間構成を扱う。基本構造は内地と共通しつつ満洲建築の要素と融合していたという。発表の梗概であるゆえの分量的制約のためか、王冬蘭と中嶋謙昌による先行研究を参照していないことが残念。

■教育

田村にしき「能の学習プログラムの開発及び実践――宮城県大崎市大貫地区に伝わる「春藤流」の謡を核として」（『音楽教育学』47巻2号）は、大崎市の無形民俗文化財に認定されている新田ノ目春藤流保存会　鉢の木会」と、能楽師（安田登・大倉栄太郎、奥津健太郎）と共に教材開発した「能の学習プログラム」の実践報告。地元の小学4年生が継続的に春藤流の謡に取り組み、謡の呼吸・発声を身体的に理解したという（安田が提唱する「新聞パンチ」が有効であったという報告が印象的）。地域の伝承文化に学校教育が関わっていく可能性を示す研究である。

渡邉康と飯塚恵理人「能楽囃子の義務教育課程音楽課程での単元化のための教材試作――《松風》破之舞の楽譜化と分析から」（『教育学部紀要（椙山女学園大学教育学部）』11号）は、著者らが以前から取り組む能楽囃子の五線譜化の試み。中学校の音楽授業において西洋音楽との対比で伝統的な音楽の特徴を理解させることを目指している。観世喜正から提供された《松風》映像を元に教材楽譜を作成し、掲載している。

■メディア

三木邦弘は、平成16年から29年にかけて、ＮＨＫの能楽放送番組567番組を録音し、曲名、流儀、演者、発信地域、放送時間をデータベース化した。「能楽放送番組データベースの構築とその簡単な分析」（『椙山女学園大学研究論集　人文科学篇』49号）は、曲名・人名表記統制などデータベース論的な問題を検討し、放送された流派や曲の傾向を分析する。主要番組が平成23年に「能楽鑑賞」から「ＦＭ能楽堂」に改称した際に10分放送時間が延びたのだが、他曲と組み合わせやすい短時間の《鶴亀》の放送が増えたといった現象が見られた由（なお、変わらぬ放送回数一位は《安宅》）。

『舞台芸術』21号は「アーカイヴを「批評」する」という特集を組み、20世紀以降の舞台芸術作品において歴史的価値をもつ映像記録8作品を批評的に検討した。そのうちの一つ、横山太郎「『トーキー葵上』」は、昭和10年に野上豊一郎が企画監修し櫻間弓川がシテとして出演した同作について、制作経緯や、撮影・編集をめぐる当時の議論を検証し、パフォーマンスの映像記録の本質的問題が、そうした試みの最初期から問われていたことを明らかにした。

■経営学

西尾久美子「企業家としての世阿弥――『風姿花伝』を人材育成と事業システムの観点から読み解く」（『現代社会研究』20号）は、『風姿花伝』を人材育成と事業システムの観点から分析する。西尾は、経営学者加護野忠男の「製品の競争ではなく製品を生み出すシステムの競争で優位に立つべき」という主張を、室町のエンターテイメント産業としての能楽に適用する。そして、世阿弥の「年来稽古条々」等の記述が、花（結果としての優れた製品）を生み出すための仕組みを改善する人材育成論・市場論・組織論になっていることを指摘し、優れた企業家としての世阿弥像を提示する。（横山）

【外国語による能楽研究】

◎単行本

○ Min Tian. *The Use of Asian Theatre for Modern Western Theatre: The Displaced Mirror*. Palgrave Macmillan, 2018.（〃ン・ティアン『近代西洋演劇におけるアジア演劇の使用：転移された鏡』）

著者は西洋モダニズム演劇によるアジア演劇技法の摂取に関する先行研究が、欧米中心の視点からなされてきたことを指摘し、伝統的アジア演劇の観点からそれらの摂取を再検討することを目指す。そして、西洋モダニズム演劇はアジア演劇を本来の文脈から切り離して、ただ「自分が望むものを見るための鏡」として利用したと非難する。

クレイグ、イエイツ、コポー、ビング、デュラン、ブレヒトによる能受容を詳細にとりあげているという点において重宝な書である。ただし、彼らの能理解に含まれる多くの誤解が、翻訳の不備だけでなく彼等自身の先入観にも依るものであったこと――つまり「見たいものを見る」営みでもあったこと――は、能受容の研究者のあいだで周知の事実であり、その意味で、少なくとも能に関して言えば、本書の指摘に新規な点はない。また、アジア演劇の観点から再検討すると書いているが、能研究に関する近年の知見が（英語圏で発表されたものすら）参照されているわけでもない。

なお本書は、モダニスト演劇人たちが欧米中心主義に基づいて能を転移（displace）したと糾弾しているが、彼等は自作こそが「能」であると主張しているわけではなかった。そもそも異文化の諸要素を本来の文脈から切り離して独自の方法で取り込まない文化など、洋の東西を問わず存在しないのであって、その営為をdisplacementと糾弾することに意義を見出だすことは難しい。

◎論文

○Michelle Kuhn,「謡曲が『源氏ひいながた』の小袖模様に与えた影響――『鸚鵡小町』と『東北』を中心に――」『アート・リサーチ』18号、二〇一八年、八七～一〇〇頁。

江戸時代の小袖文様の雛形本『源氏ひいながた』（一六八七）は、古典文学作品や歴史上にあらわれる女性たち一人ひとりにちなんだ小袖の雛形図を提示する。本論文は、そこで示される和泉式部と小野小町の小袖がそれぞれ能「東北」と「鸚鵡小町」にちなんでいることを指摘する。

○Michael Ingham and Kaoru Nakao. ""Come, You Spirits": An Alternative Afterlife to Shakespeare's *Macbeth* and *Othello*, as Mediated through Japanese Classical *Nō* and *Kyōgen* Theatre." *Asian Theatre Journal*, vol. 35, no. 1 (spring 2018), pp.112–132.（マイケル・インガム、中尾薫「『おいで、精霊たちよ』：日本の古典演劇能狂言によって媒介された、シェイクスピアの『マクベス』と『オセロ』のもう一つの来世」）

能・狂言の技法を用いてシェイクスピア作品を演出・翻案した以下の三作品をとりあげて、現代の演劇実践において能狂言がもたらす可能性を、とりわけ「贖罪」というテーマをめぐって考察する。辰巳満次郎の協力を得た泉紀子作の新作能「マクベス」（二〇〇六年初演）と「オセロ」（二〇一三年初演）はともに能の形式を踏まえ能役者によって上演される夢幻能であり、そこにおいて罪悪感と償いのテーマは原作と異なる形で展開される（例えば新作能「オセロ」においては狂言口開ケでイアーゴーの亡霊が人類すべてに対する呪いの言葉を吐き、ワキの夢中に現れるオセロの亡霊は永劫の嫉妬に苦しみ続ける）。一方、野村萬斎構成・演出の「マクベス」（二〇一〇年初演）は現代劇の手法に能狂言の要素を混ぜ合わせ、贖罪のテーマに代わり、すべてが無に帰した中から新しい生が生まれるという循環のテーマを浮き上がらせた。（竹内）